||||紹　介||||

毎日新聞「靖国」取材班『靖国戦後秘史－A級戦犯を合祀した男』

澤　　喜司郎

（I）

本書は「首相参拝が国内外の議論を掻き立て，20年前の昭和天皇の言葉がいまだに靖国神社を揺るがすのは，すべてA級戦犯合祀に端を発している。その当否をめぐっては，手続き問題，憲法(政教分離)論，歴史観といった角度から多くが語られてきた。しかし，合祀を実行した松平永芳宮司の人となりについて語られたことは必ずしも多くない。また，宗教法人になってから松平宮司が登場するまでの戦後32年間を，靖国神社がどのように過ごしていたのかが語られることもあまりない。『靖国問題』の原点であるA級戦犯合祀とは何だったのか，人物と前史の両面から探っていく」としている。

そして「合祀を決行した松平永芳元宮司は，7年後の85年1月18日夜，東京・神田錦町の学士会館で，こう語っていた。『生涯で意義あることをしたと自負できるのは，A級戦犯合祀である。現行憲法の否定はわれわれの願うところだが，その前に極東軍事裁判の根源をたたいてしまおうという意図のもとに，A級戦犯14柱を新たに祭神とした』気心知れた同士30人足らずの席で本音が出たのだろう，重大な告白だ。国の祭神名票に従い『淡々と祭祀事務を行った』と説明していたのに，実は個人の歴史観を世に宣伝するために合祀したというのだから。歴史博物館『遊就館』の再開も，根はつながっている。A級戦犯合祀は，宮司自ら宗教を政治に利用した行為だった」という。

なお，本書の構成は

第1部　A級戦犯を合祀した宮司

　第1章　皇国護持の三代目

　第2章　宮司選出の舞台裏

　第3章　改革の遺産と誤算

第2部　A級戦犯を合祀しなかった宮司

第4章　白い共産主義者

第5章　世界平和を目指した靖国

第3部　戦後の慰霊の行方

第6章　揺らいだ合祀基準

第7章　千鳥ケ淵の攻防

第8章　「戦後」からどこへ

であり，本稿では本書の内容を簡単に紹介したい。

（Ⅱ）

第1章「皇国護持の三代目」では，「靖国神社の宮司になった松平永芳氏は，神社を訪れた遺族に『松平春嶽公の直系の孫でして』と自ら名乗るのが常だった。前任者の筑波藤麿元宮司は，神社の秘書課長が『元山階宮で皇族です』と紹介すると，『やめなさい』とたしなめていたという。同じ由緒ある家系でも対照的で，永芳氏の祖父に対するこだわりがうかがえ」，「春嶽と永芳氏が重なり合うのは，激動する時代に絶えず『改革』を心がける姿勢，思想の中軸は常に『尊皇』を以て旨とした点であろう」とし，また「不運にも無念の刑死を遂げざるを得なかった『父』の悲劇，屈辱は深く心に刻まれ，戦争裁判の否定に執念を燃やす動機の一つとなった」ばかりか，「『皇国史観』を提唱したことで知られる国史学者，平泉澄氏」に「心酔していた永芳氏が，師の教えを実践する上で，これ以上望めない絶好の地位(靖国神社宮司)を占めていた日々の昂揚感は，察するに余りある」「国民の間には戦後民主主義が浸透していったが，永芳氏は反対に皇国護持の一念を一層強め」，「老年近くになって一世一代の大舞台が用意され，郷里でうずもれていた永芳氏の戦後民主主義批判の思想は，日本中，いや世界に発信されることになった」としている。

第2章「宮司選出の舞台裏」では，「A級戦犯合祀は筑波氏の後，松平氏が宮司に就任してすぐに行われた。ということは，松平宮司の選出自体が，そもそも合祀を実行するための人選だった」「松平永芳宮司には，敗戦とは別の新たな時代の荒波から靖国神社を守る役目も負わされていた。松平擁立の狙いは当たった。神社トップの交代は，リベラルでおおらかだった筑波時代から，保守的で厳格な松平時代へ，靖国神社の性格を大きく転換させ」，「松平宮司は東京裁判史観を否定するためA級戦犯合祀に踏み切った。松平宮司の選出には，靖国神社を保革対決時代の保守勢力側の重要な橋頭堡として位置づけ直す運営方針転換の思惑が込められていた」とし，「戦前，テロに走った右翼の論客が，『靖国擁護体制』を強化する団体のトップとし

て元最高裁長官を口説き，その2年後，今度はその元長官が靖国神社の新たな宮司を誕生させ，A級戦犯合祀が成し遂げられた。松平宮司の選任は，戦後，民主主義化していた靖国神社を苦々しく思っていた勢力が，神社に打ち込んだ楔だった」「松平宮司誕生の舞台裏を洗い直すと，A級戦犯合祀は単に松平宮司一人の行為ではなく，松平宮司を擁立した社会的勢力の表出があったと考えずにはいられない」という。

第3章「改革の遺産と誤算」では，松平宮司が行った改革には人事一新（定年制という事実上のリストラ）や戦史資料館「遊就館」の復元・運営の再開による財政再建などがあり，「今日，多くの来場者でにぎわい，神社の大きな収入源になっている」遊就館再開には「財政再建だけでなく若者の教育拠点」つまり「軍部から神社に運営を委託された戦後，宝物遺物の整理，保守管理にとどまっていた遊就館の役割を，日本社会の教化施設へ転換した」とし，また「成立していれば国が神社の維持費を支出することになったはずの国家護持法案が成立しなかったことで，靖国神社は否応なく財政の基盤作りを迫られていた」が，それとは無関係に松平宮司は「減っていく戦没者遺族に頼らず，民間の一宗教法人として新たに独自の支持層を獲得し，それを基に経営を安定させたいと考え」，さらに徹底した政治不信にあった松平宮司が「就任して真っ先にA級戦犯合祀を決行したのも，国家護持となれば合祀対象者も晴れて国が決めることになってしまうが，政治家は世論におもねって筋の通らないこともするから，その時を待たず，国に期待しないという意志表明でもあった」としている。

（Ⅲ）

第4章「白い共産主義者」では，「靖国神社には国家神道の戦前・戦中から今日まで，途中，民間の宗教法人になりはしたものの，一貫して軍国主義的性格を変えずに突っ走ってきたようなイメージがある。特に軍人気質のまま宮司になったような松平永芳氏の登場は，その印象を決定づけた。A級戦犯合祀によって，いったん法的，政治的に断罪された軍国主義指導者たちの名誉回復を図り，戦後日本社会が決別したはずの皇国史観を再興普及する拠点施設としての役割をあらわにしたからだ。しかし，実際の靖国戦後史は，そう平坦なものではない。むしろ戦後60年間余の前半，元皇族の筑波藤麿宮司が在任していた32年間は，靖国神社といえども日本社会に定着しつつあった民主主義の息吹と無縁ではなかった」「宗教として，厳しく純化路線を追求する松平時代に比べれば，混沌とした多様性を受け入れる幅の広さを

持っていた」という。

そして，「自分は白い共産主義者」と自らを称していた筑波宮司については「『左翼』的傾向があることを自認していた」が，「靖国神社と共産主義という本来対立する概念を組み合わせたところに，筑波宮司のウィットが込められている」とし，「徹底した平和主義者であった筑波宮司」はＢＣ級戦犯を合祀したが，Ａ級戦犯合祀を見送った理由は「戦争指導者を簡単に許すことができないという素朴な正義感」と「旧皇族ならではの昭和天皇に対するおもんぱかり，複雑な国民感情への目配りなど総合的な判断が働いていた」としている。なお「筑波宮司の選任には，高松宮の兄で，枢要な人事に細かく気を配った昭和天皇の意向もあったと推測される」としている。

第5章「世界平和を目指した靖国」では，「戦前の荘重厳粛な雰囲気が一変したのは，終戦による解放と民間法人化だけが理由ではない。そこには，戦争の反省と戦後の平和主義を強く自覚し…軍国主義との決別を強く訴えた筑波宮司の信念が大きく影響し」，「日本の兵隊だけでなく，全世界の戦没者および日本国内のこれまで合祀されていなかった戦没者の霊を祀る社」である鎮霊社が建てられた。「鎮霊社は世界平和への祈りを込めた施設だった。筑波宮司は戦後の靖国神社を，戦前の軍事色を消し去って普通の神社にしたいと願っていた節があり，鎮霊社はそのシンボルだった。靖国神社が無謀で悲惨な戦争遂行に深く加担した責任を問われることなく戦後も存続し得たのは，民間宗教として再出発する道を選択したからであった。筑波宮司は，それを単なる法人格の衣替えに終わらせず，神社としてのあり方そのものまで転換していく契機にしようとしていた」という。

国家護持に批判的だった筑波宮司は「戦前・戦中の合祀基準にこだわらず，未来への展望を開く平和主義に基づいてすべての戦死者を祀ろうとし」，「神道はもともと教義も定かでない柔軟性を特徴とする。まして戦後の靖国神社は一民間宗教法人であり，何を合祀し，何を信仰対象にしようと本来自由なはずである。万事おおらかで許容範囲が広い筑波路線は，靖国神社の戦前からの一貫性を信じたい人々にとっては批判の対象だったが，当の筑波宮司は，むしろ自分こそが筋を通していると自負していた」としている。

(Ⅳ)

第6章「揺らいだ合祀基準」では，「Ａ級戦犯合祀は，世論や政治情勢，皇室の意向だけでなく，戦後の靖国神社のあり方と国家護持の展望，それと関連する合祀基

準の条件・範囲に照らし，そもそも内在的な自己矛盾を抱えていた。そのことは，A級戦犯の祭神名票が送付され『宮司預かり』となった時期，国家護持法案が国会の争点だった当時から，靖国神社や神道界の専門家たちがはっきりと指摘していた。合祀保留の判断は，こうした重層的検討の上に成り立っていたが，それと知ってか知らずか，松平宮司は合祀を断行。その後，様々な後付けの理屈を持ち出して今日に至っている。しかも靖国問題が政治の焦点となるにつれ，いつの間にか『神道全体への攻撃だ』とばかりに，神社本庁までもが靖国護持の隊列に加わり，今や最前列で政治的行動を展開するようになった」とし，「合祀基準は何かと言えば定義がないのが実情なのである。…建前と現実が乖離し，内在的な矛盾を拡大してきたのが戦後の靖国神社だった」としている。

第7章「千鳥ケ淵の攻防」では，千鳥ケ淵戦没者墓苑について「政府の態度には一貫性がない。遺族会に言い含められて閣議決定の時は『引き取り手のない一部の遺骨を収納する限定的な施設』としながら，奉仕会に押し返されると竣工式では『全戦没者を象徴する施設』と言い直すのでは，結局どちらともつかず墓苑のあいまいさに拍車が掛かった。決定までの援護会と遺族会の対立が，建設後はそのまま千鳥ケ淵戦没者墓苑と靖国神社の対立に引き継がれ」，千鳥ケ淵戦没者墓苑は「創設以来，靖国神社との攻防に巻き込まれ，『第二靖国』の地位に押し込められた現在も，靖国問題をめぐる政界の動きに翻弄される。墓苑は国家慰霊施設に脱皮する可能性を秘めたまま，今も靖国神社から約500メートルのお堀端でひっそりたたずんでいる」という。

第8章「『戦後』からどこへ」では，「集団安全保障の名の下に，いつ事実上の『戦死者』が出るかもしれない『新しいあいまいな戦争』の時代を迎え，国は新たな慰霊の方法を問われている」「万が一，21世紀の新たな戦死者が出て，防衛省の敷地内にある国の施設に祭られたとしたら，靖国神社は決して黙っていないだろう。新しい『靖国問題』の導火線は，いつ着火しても不思議はない」「戦後の『靖国的矛盾』を放置し，靖国自身が変革を拒み続けている間に，幸いにして未だ出ていない21世紀の新たな『戦死者』を慰霊する場は，すでに靖国神社から遠ざかり，メモリアルゾーンへ移っているともみえる。国があり，『軍』を持つ限り，『戦死者』に対する国家の慰霊の課題は避けて通れない。天皇とも神道とも無縁な行政による慰霊施設が，靖国に取って代わる日が静かに近づきつつある」と結んでいる。

(Ⅳ)

本書はあとがきで，靖国神社が「外にいくら強がっても，靖国が戦後，内に抱えてきた矛盾は隠しようもない。自ら変わらない限り，早晩もたないだろう。だが，靖国だけを責めるのはフェアでない。『靖国的矛盾』とは，戦後日本が自らの戦争責任追求という問いを封印してきたツケでもあるからだ。『戦没者のお陰で繁栄した』というのは情緒的な俗論だ。あの理不尽な多くの死にもかかわらず敗戦後の繁栄があった。だが，繁栄の陰で置き去りにしてきた大事な自問と，『私』たちは今，向き合っている」としている。本書は何を言いたいのかが判然としないというのが正直な読後感である。

ただ，靖国神社そのものについて知るには適当な書物の一つといえるが，現在の靖国神社問題は靖国神社と本書がいう「私」の間に位置する朝日新聞や日本経済新聞など一部のマスメディアによって靖国神社が政治的に利用されているのが現実であり，このような視点から見る目も必要だろう。現在の靖国神社問題を正しく理解するには，上坂冬子『戦争を知らない人のための靖国問題』(文春新書，2006年)が最適の書といえる。

以上，本稿では本書の内容を簡単に紹介してきたが，浅学非才な筆者には的確な紹介ができず，また筆者の不勉強による誤読の可能性もあり，この点については著者のご海容をお願いする次第である。

(毎日新聞社，2007年8月，245頁，定価1,500円+税)